

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 冬日影 霜の阿蘇 : 自由律俳句 |
| Author(s) | 宮崎, 八束 |
| Citation | 龍南, 230 : 34 - 35 |
| Issue date | 1935-02-23 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/7245 |
| Right | |

自由律俳句

文二 甲三 宮 崎 八 束

冬 日 影

玄關につるした笹の葉に霜の冷さ。(痘禍二句)

呪の笹枯れた淋しさ夕べなる

早く起きれば月の入りそれを踏み

白い息はきながら母に梢折つてやる。

朝霧の深く空に長い杉ある。

墓場の櫨の木裸で青空

晴れた山に冬は日の丸じつと

やんわり日光を抱く山の紫

冬枯れの野日のあふるゝに一人ゐる

墓場は落葉を焼く煙の夕暮れ

吊し柿の向ふ月が細く震へてをる
せんだんの上は冬月雲の流るゝ
枯木の影に湛ふ青さ月夜で
ひつたり闇に包まれ梅匂ふ頃

霜の阿蘇

五岳見えそめてかんがり朝焼
曇つた空の噴煙は重く霜を行く

風の強い冬の山小屋はラムネの空壇だけ
公園の立札ある山の湯に着けばせゝらぎ（垂玉温泉二句）

細い瀧の谷川となつて高い木の橋

瀧の音の耳に宿る静けさ旅空（結返り瀧一句）

（九・一二・二六）